

## 令和2年度 第3回さいたま市子ども読書活動推進会議 意見聴取書まとめ

開催日時 令和3年2月1日（月）～15日（月）

開催場所 各委員から書面により意見を聴取

委員 汐崎順子、池田拓矢、厚澤浩、加藤路子、平田潤子、中野顕彦、木下美紀、  
斎藤麻衣子、矢野智美、大山広行

公開・非公開の別 非公開

書類提出 10人全員

議題 さいたま市子ども読書活動推進計画（第四次）[素案]について

### 【意見聴取書内容】

1 素案全体の構成について、どのようにお考えですか。

<委員>

読書活動推進計画も第四次計画になり、「なぜ計画を策定し、実行するのか」の問題意識についての記述が希薄になっているように感じます。「第1章 計画策定の背景」には、子どもを取り囲む状況の変化（特にIT環境の変化）、国の動き、さいたま市の動きについて記述がありますが、そもそも、子どもにとっての読書とは何か、さいたま市は子どもの読書をどのように重視しているのか。「子どもの読書」の意義と位置づけ、それに対する自治体の責務を明確に示していただきたい。参考として、第二次計画では、第1章の冒頭に「子どもの読書活動の意義」が書かれています。

5pには、さいたま市がSDGs未来都市に選定されたことが述べられています。その考え方が推進計画の取組に反映されることになった、ということは分かるのですが、そもそもSDGsとは何か、どういう視点で計画に取り入れるのかの説明がなく、学校での取組として「SDGsなど現代的課題に関連する蔵書の充実」が示されることに戸惑います。また、学校での取組と資料編の「さいたま市子ども読書活動推進計画」のSDGsとの関連性がよく分かりません。計画全体に関わる大切な考え方として、最初の部分でももう少し丁寧な説明がほしいです。例えば、脚注などでもSDGsについての補足説明を加えるなど。

<委員>

とても良いと思います。

<委員>

全体的にまとまっていて、よくできた素案だと思います。

国立情報学研究所の新井紀子教授によれば、現在、子どもの読解力が低下していて、教科書の文章を理解できない子がかなりの割合を占めるそうです。そういった社会状況において、一人でも多くの子どもの読書習慣を形成し、豊かな学び、将来の目標を持たせることは、大変有意義なことと思います。

<委員>

本市の子ども読書状況を見て、憂える状況ではないように思われますが、コロナ禍の影響も考えると、本離れの心配をしてしまいます。人との交わりが少ない中、本から得られるものの大きさを考えると、じっくりと本の登場人物と交わってほしいのですが…。

<委員>

全体の構成はわかりやすいと思います。

<委員>

子どもの読書活動推進のためには大人の読書意識が重要だと考えていますので、子どもだけでなく大人対象の方策が増えていることは評価できます。

一方で、元々本がある程度好きな人が対象になっているように思われるものが多いように感じます。SDGsを関連付けるのであれば、「誰一人取り残さない」という基本理念に基づくことが大切だと思いますので、理想を掲げるなら、『不読率0%』や『本好き100%（≒本嫌い0%）』の達成というところなのではないかと思います。まずは素案にある「さいたま市の子どもたちは日本で一番本が好き」を目指すことがよいと考えます。

読書調査について、5年間の児童生徒の追跡調査を示せるようにしていただきたい。第四次の初年度からの取組が最終年度でどのような成果となったかがわかるように。高校も同じで、人数は少ないでしょうが市内小中学校出身の市立高校生が対象であればよいわけですから（設問に出身校を尋ねる項目を入れるなど）ぜひ取り組んでください。

<委員>

おおむね賛成します。ですが、取組・活動内容、具体例などが足りないと感じました。

<委員>

現代的課題等を踏まえた計画策定の背景及び第三次計画の成果と課題が分かりやすく示されていると感じました。また、第四次計画について、家庭、保育所・幼稚園、地域、学校、図書館等が連携して実施する新規取組や子ども読書活動の推進取組の具体策が示されており、それぞれの役割が明確になっていると感じます。

<委員>

各場所での取組を図書館が橋渡しするという事が、分かりやすく形になっていて良いと思います。

<委員>

説明が必要な言葉が何度も出てくるので、索引を設けた方が読みやすいと感じました。

2 第四次計画の数値目標では、当初計画から第三次計画までの、小中学生の「不読者の割合」を0%に近づけていくことを目指すことに代わり、小学生から高校生までの「読書が好き」な割合を高めていくことを目標に掲げました。この目標及び数値目標について、どのようにお考えですか。（素案14p）

<委員>

実質的には不読者率を0%にするのは非常に困難（不可能？）でしょうし、読書は単に「読めばいい」というものではないので、今回の「読書が好き」という視点での目標設定のほうが良いと思います。

目標設定の背景説明について（7p～）さいたま市は「読まない」ではなく「1冊以上読む」という項目から不読者の率を算出する形での説明になっています（学校読書調査の不読者率の調査とは異なる）。この説明が分かりにくいと感ずます→「不読者の割合」としているのに7pの図表1では1か月に1冊以上読む人の割合、8pでは不読者率の説明、と異なる要素での説明になっています。表現に工夫が必要ではないでしょうか。

7pの「ア読書冊数と不読者の割合」とありますが、「読書冊数」ならば、子ども達が1か月に何冊読むか、といった実数が示されるべきではないでしょうか。

小学生は高学年になるに従って「本が好き」の比率が低くなるためその手当てが必要、という説明は分かります。しかし中高生では学年が上がるに従って比率が低くなる状況ではなく（13p）、高校3年生は小4～6年よりも高いパーセンテージになっていることについてはどう捉えればよいでしょうか。

現状の数値から小、中、高の目標パーセンテージを算出しているので仕方がないのかもしれませんが、設定の目標値が、小学生、高校生が85%であるのに対し、中学生が76%と真中がへこむ（低くなる）ことに違和感があります。

<委員>

現実的な数字で良いと思います。

<委員>

不読者の割合を0%に近づけていくという非現実的かつ曖昧な目標より、より具体的なものになったのは好ましいことだと思います。また、数値も適正な目標値と思いました。

<委員>

「読書が好き」な子を増やすためには、何としても小学生の時から読書習慣をつけることが大切かと思われます。調べ学習の時などは図書館の本を積み上げながら数人で本の見方を話し合っている姿を見かけ、ほほえましく思っています。どんなきっかけからでも本を手にしてほしいです。

<委員>

新しい視点を持つという意味で良いことだと思います。

ただ、数値化することは、不読者の割合より難しいと感じます。

<委員>

目標を変えることには異論はありません。ただし「好き」にもいろいろありますので、単純な調査ではまたあいまいな数値が出てしまうことが予想されます（不読率の調査時に「朝読書は入れるのか」「何を本だと定義するか」などが不明だったと認識しています）。

そのため、ブレの少ない「好き」の定義を示す設問にするなどを心がけていただきたいです。

また、目標の文言があいまいなので、素案21ページにある「さいたま市の子どもたちは日本で一番本が好き」を目指すといった明確な目標を掲げるべきだと思います。

最後に、不読率の調査は継続して行っていただきたいです。不読率0%を達成したわけではありませんので。このタイミングで定義を明らかにして数字を取り直すのでも良いと思います。

<委員>

数値目標は良いと思います。

数値をクリアすることよりも、やはり、読書好きな子どもを増やすこと自体が課題だと感じました。

<委員>

本市教育委員会では、「さいたま市の子どもたちは日本で一番本が好き」の実現を目指し、「さいたま市学校図書館資源共有推進事業」に取り組んでいます。今回の「読書が好き」な児童・生徒の割合を高めていくという目標は、この取組とも合致していると感じました。

ただし、学年が上がるにつれ不読率が高まるという傾向は本市でも見られますので、不読率を減らすための取組も重要だと感じます。

<委員>

15年間の取り組みで不読者0%は達成できませんでしたが、どの年代においても割合が改善しており、事業継続による底上げが見られたのではないかと思います。その上で、読書への抵抗感のない子を増やす「読書が好き」な割合を高める目標は、次のステップとして適切と考えます。数値目標については、妥当かどうか分かりません(小1と同等程度の割合という所が高い目標のようにも思えるし、高校生のように読む行為と本に対する感情は必ずしも一致しないので、感情への働きかけは容易のようにも思えるので)。

<委員>

記載なし

3 場の共通した取組としては、子ども読書活動の推進のための普及啓発活動として、1 「さいたま市子ども読書の日の創設」、2 「冬の読書キャンペーンの拡充」を掲げています。「さいたま市子ども読書の日」については、4月23日「子ども読書の日」にちなみ、毎月23日を読書の日として啓発することによって、読書に意識を向けることを目的とするものです。

「冬の読書キャンペーン」については、これまで、学校と連携した取組として行っていますが、取組の場をさらに広げていくことを考えています。この普及啓発活動について、どのようにお考えですか。(素案16p)

<委員>

読書にちなんだ日、あるいは一定の期間を設定することについて異論はありません。さらに大切なのはそれらが読書推進活動全体の中で特別なもの、切り離されたものでなく、日々取り組んでいる活動の意義を確認し、さらに広めようという意識を持つきっかけとなる日、あるいは期間なのだという共通意識を持つことと考えます。ここから、なぜ、こういう日があるのか、何をするのかについての詳細を受益者である子どもや親にも広く知らせていくこと、PRをしっかり行い、共通認識として定着するように努めていただきたい。

一点、16pに“読書をする機会が減少する冬の時期”という説明がありますが、冬は読書の機会が減少する、と説明する根拠はなんでしょうか？

<委員>

より広く啓発してほしいです。

コロナ禍で外出を控えている状況と読書は相性が良いと思います。

<委員>

「子ども読書の日」や、「冬の読書キャンペーン」というのは、多分一般の人々は知らないと思うので、もう少しアピールが必要かと思います。

それと、読書をする機会が冬には減少するとの記載がありますが、理由がよく解らないですね。夏休みには、読書感想文の宿題が出て、それで仕方なく強制的に読まされ、冬休みにはそれが無いから読まなくていいやとなっているのかなとも思いますが。

<委員>

記載なし

<委員>

冬の読書キャンペーンの従来取組は具体的にどのような取組がされているのでしょうか？

「読書をする機会が減少する冬の時期」と記されていますが、どのような調査結果から得られたものですか？

冬は家の中で過ごす時間が増えるので、冬の読書キャンペーンそのものは良い取り組みだと思います。

<委員>

読書の日創設に異論はありませんが、私には“毎月23日は「ふみの日」”という意識があります。差別化を図るのか、関連付けるのかはともかくとして、ジャンルとしても遠くないので意識をする必要はあると思います。

冬の読書キャンペーンについては、冬に読書機会が減るという感覚がないのでエビデンス部分に疑義があります。あるとしても、2か月間という長さはダレてしまうきらいがあるので効果的とは思えません。むしろコロナ禍における“おうち時間の過ごし方”的な提案であれば賛同しやすいですが。

<委員>

そもそも、毎年4月23日が「子ども読書の日」ということを知られていないのではないのでしょうか。「子ども読書の日」のポスターを掲示する。すでにポスター掲示をしているなら、より視認性が高まる場所にポスターを掲示するなど工夫が欲しいと思います。まずは、4月23日「子ども読書の日」の認知度を高める。そして、毎月23日「さいたま市子ども読書の日」もまずは認知してもらおう。習慣になるような読書活動（本の中で気になった言葉、文章を書き出すエッセンシャルシート・ノートを作成するなど）。本を深く読むためのヒントを子どもに感じてもらう。毎月エッセンシャルを貯めて振り返った時に、本から様々なことを学んだという証として残り、財産になるのではないのでしょうか。クラスで隣同士の生徒とノートを交換して互いのエッセンシャルノート（シート）を読み比べても良いと思います。刺激になり、気付きや新たな本との出会いにつながります。

2か月間、冬の読書キャンペーンを行っていますということを、かわいいPOP掲示などをして認知してもらおうことが一番大切です。学校図書館、公共図書館ともに、キャンペーンを大々的にPRする。手作りしおりやリーディングトラッカーを作るコーナーを図書館の一角（学校も同様に）設けたりするのはどうでしょうか。楽しんで取り組める活動が年々広がっていけばよいなと思います。

<委員>

学校図書館においては、11月23日～1月23日の間を「冬の読書キャンペーン」として設定し、各学校で工夫して活動に取り組んでいます。それぞれの学校での取組内容については、4月に行われる学校図書館司書研修会等でフィードバックできるようにしたいと考えています。

「さいたま市子ども読書の日」の取組も「冬の読書キャンペーン」の取組も、学校・図書館・家庭とで連携を図っていく必要があると考えますので、取組の場を拡充していくことは普及啓発の活動として適当だと考えます。

<委員>

読書に親しむ機会が増えるのは、良いと思います。これをきっかけに、新たな取り組みが生まれるのも期待しますが、各場で行っていた既存の取り組みに、共通の冠を付ける等でも効果はあると思います。同じ文言やキャッチフレーズを色々なところで市民が目にするすることで、さいたま市全体で取り組んでいる雰囲気演出できるからです。また各場のイベントで、他からの利用や参加が可能なコンテンツについて紹介し合えば、相互の繋がりもアピールできると考えます。

<委員>

記載なし

4 家庭での取組として、1「家読（うちどく）の推進」、2「子どもと本を楽しむためのコンテンツの作成・PR」を掲げています。新しい取組では、子どもの育ちと読書との関係性について、保護者の理解が深まるように、情報紹介ページ作成等を通じて発信していくものです。この重点的な取組について、どのようにお考えですか。

また、家庭での取組全体についてもご意見がございましたらお書きください。

(素案17p)

<委員>

「家庭」は、通常子どもたちが最も長い時間を過ごす場所であり、ここでの読書を推進することの意義は大きいので、「(1) 家庭での取組の説明」ではそのことをもっと強調してもよいのでは。特に年少者（小学校低学年くらいまで）の読書については、子どもに対する働きかけ以上に、環境を整える親、家族の理解と共感が必要です。

<委員>

良い取り組みだと思います。

親をターゲットにした（親が本を読まない場合が多い）取組があっても良いと思います。

<委員>

家庭における読書活動は、二極化していていると思います。

熱心な家庭は、毎日のように読み聞かせをし、保護者も読書をしていますが、そうでない家庭は、本というものとはほとんど無縁です。（スマホは毎日必ず見る）情報紹介ページの作成はとても良いことですが、この情報作成ページを見てみようとするきっかけを与えないと、さらに分断が進むだけでしょうね。

ブックスタートは大きなキーになると思いますが、前回の会議で伺ったところによると、市当局は、ブックスタートの目的を家庭と本を出合わせるのではなく、子育て支援センターのアピールのためとしているようなので、これは、ブックスタートの目的理念に沿っていないと思いますね。改めるべきです。

<委員>

記載なし

<委員>

図書館や子育て支援センターに参加できる人もできない人にも幅広く情報が行き届くので良い取り組みだと思います。

家読の推進には、まず家に本があることが大切だと思います。

より多くの親子にブックスタートパックが手渡せるよう子育て支援センターに行けなかった人へのフォローアップを検討していただきたいです。

<委員>

家読コンテンツを作成しても対象の親世代が閲覧しなければ意味がありません。子育て系の部署との連携が重要だと思いますが、読書が子どもの人生にとって重要であるという共通認識の下で有機的に進めていただきたいです。

例えばブックリストについてもそうで、とても良いものだと感じていますが、私の周りには存在自体を知らない人がほとんどだったこともあり、「たくさんありすぎてわからない（そもそも手に取らない）」「ブックリストを読むのがちょっと…」という意見を持っていました。まずは大人に読ませる（触れさせる）ことに注力する必要があると感じています。

そうした意味でもブックスタートの機会はとても重要です。会議場では議論がかみ合いませんでしたが、配布率を上げて欲しいわけではなく、より有効な情報提供ができるようにして欲しいので、部署間の垣根があるのであればそれは取り外していただき、「さいたま市」として事業を進めてください。いつでも好きな時間に本を取りにいける状況の仕組みもよいですが、「決まった時間にママ友たちと行って一緒に説明を聞けると良かった」という意見もありました。参考になればと思います。

#### <委員>

以前、小学校の家読キャンペーン用紙を数回受け取ったことがあり、それは、同じ本を読んで各々感想（家読に取り組んだことへの）を書くというものでした。

自宅で過ごす時間が長い今だからこそ、家読の必要性を感じる。同じ本を親、兄弟、祖父母（アクティブシニアも多いので）、3世代で読めたら、共通体験・共通言語の獲得ができて、とても良い思い出になると思います。子どもがお気に入りの1冊を家族に勧めるなど、子どもが勧める一冊を親も読んでみましょうという流れが良いのではと思います。

我が家の例ですが、「エルマーのぼうけん」シリーズを読んだ後に、児童館で「エルマーのぼうけんすごろく」で遊んだことがあります。お話に興味を持ったきっかけを、そういった遊びに転化し、さらに、お話の世界を楽しめることができることを多くのご家族にも知ってほしいです。

もう一つの提案があります。おすすめしたい本は誰にでもあると思いますので、小中学生の保護者対象に、自分が小中学生時代に読みたかった（読んでよかった）本を任意で紹介してもらい、その中から学校図書館にない本は入荷するようにするという取組はどうか。

#### <委員>

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために、家庭で過ごす時間が増えていることから、デジタルコンテンツの作成・配信は非常に有効な手立てであると考えます。子育て世代向けのデジタルコンテンツとなっていますが、保護者だけでなく、子どもも一緒に見て楽しめるようなコンテンツもあると、より一層「家読」の推進が図られるのではないかと感じました。

割合は少ないかもしれませんが、ネットワーク環境が整っていない御家庭もあるので、そうした御家庭への配慮も必要かと考えます。

#### <委員>

届けたいターゲットに合わせた情報発信を行うのは、良いと思います。コンテンツ作成にあたっては、情報発信の形態などにより、読書に関心のある人向けとそうでない人向け



を分けられるとより良いのではないかと思います。

<委員>

子どもの頃の家庭環境は、読書の習慣化に影響しますので、保護者への情報発信は重要だと思います。発信した内容を、きちんと保護者が受け取っているかを、アンケート等により確認し、結果によっては、媒体の変更等を含め、情報発信の方法を見直す必要があると思います。

5 保育所や幼稚園での取組として、1「図書館ブックリストパックの提供・PR」を掲げています。これまで、市内の公立保育園と地域の図書館が連携し、イベント開催や貸出サービスの実施は行っていますが、新しい取組では、子どもがお気に入りの本に一冊でも多く出会えるように、図書館で作成しているブックリストを保育所や幼稚園で活用することを目的としています。この重点的な取組について、どのようにお考えですか。

また、保育所・幼稚園での取組全体についてもご意見がございましたらお書きください。(素案18p)

<委員>

さいたま市が以前からブックリストの作成に取り組み、良いものをつくってきたことは承知ですが、今回の「ブックリストパック」は既存のリストを活用する(幼稚園、保育園での読書推進活動支援を目的とした再構成ではない)ということでしょうか。ブックリストは定番のものは維持しつつ、入手できなくなるものがありますので、一定のスパンでの見直し、刷新作業は必要だと思います。

ブックリストはあくまでも「入口」、「手段」であり、読書そのものの体験にはなりません(ブックリストを手にしても「本を読んだこと」にはならない)。幼稚園や保育園がブックリストに掲載されている本をきちんとその場で保育士や幼稚園教諭が手に取り確認できること、子どもに届けられること、保護者に手渡したり示したりできることが大切です。ここに書かれている「団体貸出サービスの活用、絵本の利用や読み聞かせ等に役立てる」という説明には「ブックリストに掲載された本を団体貸出で届ける用意がある。そのための蔵書のストックの用意が図書館にある」という前提があるべきですがどうでしょうか。提供の手立て(道筋)も明確にしてほしいです。幼保の蔵書は図書館に比べて非常に少なく、厳しいものがあるはずですから。

<委員>

先生の読み聞かせの技術向上を連携していけたらよいと思います。

<委員>

絵本の読み聞かせにおいては、良質な絵本を選ぶことができるかどうか、キーポイントとなるので、優れたブックリストの提供は歓迎すべきことです。が、これを利用しようとする気があるかどうかが一番の問題だと思います。園・または保育者にもよりますが、「保

育雑誌」を「絵本」と思っていたり、いわゆる「カワイイ絵」、子どもが食いつく絵の本を「良い本」と思っていたり、そもそも絵本の読み聞かせ等は、保育時間の隙間におまけとして行えば十分と認識している場合も結構あるような気がします。そういった方々は、ブックリストを手取るような気はないでしょう。その意識をどう変えていけるのが、最大のカギです。

<委員>

絵本に親しめる環境づくりはとても大切だと思います。保育所や幼稚園では先生方もお忙しいようですので、お手伝いできるのであればしていきたいと思います。(ブックリストをどこまで参考にさせていただいているのか疑問です。)

<委員>

とても有意義だと思います。

図書館ブックリストパックは公立保育所の他にも私立保育所、私立幼稚園などに提供されるのでしょうか？

<委員>

保育所・幼稚園のスタッフの方々の個人資質・努力によるスキルアップではなく、行政サイドからも支援があるという取組は非常に良いと思いますので、引き続き実施していただきたいです。

追加の意見としては、研修参加人数を指標にするのではなく、参加者の質的变化を見ることができるよう指標としていただいた方が、講師を務める側としても有用だと考えます。

<委員>

まず親は、保育所や幼稚園で子どもが何の絵本を読んでいるか、それ自体知らない。例えば、知りたいと思っても、子どもが本のタイトルを覚えてきて教えてもらうくらいしか術がない。多忙な先生方に絵本のタイトルを確認するのは気が引けるからです。図書館で作成しているブックリストを活用すれば、絵本を知りたいという問題は解決します。例えば、半期(4月～8月、9月～3月)に1回、ブックリストをコピー(読み聞かせをした絵本のみ)し、丸印で囲む、印を絵本の横につけるなど、読んだ本が分かるようにすれば良いのではないのでしょうか。ブックリストのコピー(ある程度拡大したサイズで見やすく)を保育所・幼稚園の園内に貼っておくのはどうでしょうか。私はその情報を当時知りたかったので、先生のお手間を取らずに、間接的におすすめ本を知ることができるのはありがたいと思います。また、同時にブックリストに掲載されている良書を園活動で使用していると保護者に伝わることで、園への理解が高まるのではないかと。双方向に利益が望めると思っています。

<委員>

選書について、それぞれの保育所・幼稚園、義務教育段階においては学校に任せているのが現状かと思います。そのため、パックになったブックリストの送付は、非常に有効だ

と考えます。

今後は、小・中学校においても、必要に応じて図書館との連携を図り「図書館ブックリストパック」の活用が図れるとよいのではないのでしょうか。

<委員>

今までも保育所や幼稚園との連携は様々行われていますが、どうしても利用に差が生まれているように思います。是非、利用が伸びない理由も調査し、現場に即した取り組みとなるよう望みます。

<委員>

記載なし

6 地域での取組として、「公民館主催事業「親の学習事業」において、子どもの読書に関する講座を開催」を掲げています。これまで、子どもの読み聞かせ活動を推進してきましたが、今後はさらに、家庭での子どもの読書の大切さについて、保護者に焦点をあてた取組を推進していきます。この重点的な取組について、どのようにお考えですか。また、地域での取組全体についてもご意見がございましたらお書きください。  
(素案19p)

<委員>

4の「家庭での取組」への意見に書いたように家庭における読書環境を充実させること、家族そろって読書の楽しさを知ることが、子どもの読書推進活動に直結するものと考えますので、保護者に焦点をあてた取組を強化することに賛成です。一方で、公民館や児童センターの環境整備をし、取組を充実させるための努力をしたとしても、保護者が公民館や関連する施設に足を運ばなければ、折角の環境や取組を享受することができません。広く市民にPRすること、関心を持たせ、「行ってみよう」、「行ってみたい」という気持ちを起こさせるような活動も大切です。「来るのを待つ」だけでなく、「積極的に来てもらう」「利用してもらう」手立てについては言及しなくてもよいのでしょうか。

<委員>

とても良い取組だと思います。

<委員>

「親の学習事業」に出席してくる保護者は、意識の高い方々で、そういった人々は、益々知識を得、子どもも家庭も豊かで幸せになります。

問題は、今まで本に苦しめられた経験しかしてこなくて、本を手取る気がない親。こちらが多数派です。

これらの親も「親子体操」や「無料コンサート」などのイベントには来るので、そういう時に、おまけのコーナーとして絵本を展示し、読み聞かせをすると子どもにも、親にもこんなよいことがあります、というポップなどを作成し、絵本に詳しい司書の方がお勧めの絵本を紹介したりする場があると良いかもしれません。

<委員>

保護者に焦点をあてた取組は一番力を入れていくところだと思います。ただ、最近のご両親は公民館の利用が少ないと聞いています。

うらわ美術館にはたくさん来館していただきますので、内容次第なのでしょうか。

<委員>

身近な公民館で行われることにより、保護者の方々も参加しやすいと思います。

図書館と連携した取組になっていますが、講師や講座の内容は図書館が決定するのでしょうか？連携の形が分かりません。

<委員>

親（大人）への学習機会の提供はぜひ拡充していただきたいです。ほとんどの親は自己流だと思います。

さらに言えば、親自身が本好きであればこうしたセミナーも受講するでしょうが、そうでない人にとってはどうなのか。一般的には6割程度が本好きというデータもありますが、子どもの成長のための重要なツールであることが理解されれば受講を希望される方も増え、長期的な底上げにつながるのではないのでしょうか。

<委員>

読み聞かせ会で紹介した絵本の世界をより楽しむ取組を期待します。絵本の読み聞かせとともに、パネルシアターやペープサート、ワークショップ（絵本の中に登場した食べ物や小物などを折り紙で作成してみる）などを通して、絵本がより子どもの記憶に残ります。

楽しい工作や折り紙など、定期的で開催してくれている公民館が多く、私自身子どもの幼少期に大変お世話になりました。

読み聞かせ会と工作、ワークショップなどが個別で動いているのも良いが、その中の1、2冊だけでも関連した工作ができれば、なお良いと感じます。

児童センターに期待することとして、パネルシアターは親子で大好きだったので、家庭では真似できない「ブラックパネルシアター」を、今後もぜひ作成、発表していただきたいです。

うらわ美術館の取組については、ワークショップの開催時期を冬の読書キャンペーンと重ねて、普及啓発につなげるのはどうでしょうか。

<委員>

公民館主催の「親の学習事業」における「子どもの読書に関する講座」の開催は、とても有効だと考えます。「家読」を推進するに当たっても、まず保護者の理解が必要となりますし、本の選び方や読み聞かせの仕方など、具体的に知らせていくことで、保護者への啓発にもつながるのではないかと思います。

<委員>

保護者のニーズに合った講座内容の設定は難しいですが、直接啓発できる良い機会ですので、地道に進めてゆけると良いと思います。

<委員>

子どもの頃の家庭環境は、読書の習慣化に影響しますので、保護者への働きかけは重要だと思います。ただ、保護者に働きかける意図が保護者に正しく伝わっていない場合、働きかけの効果が得られないことがあると思いますので、意図を保護者が正確に受け止めてもらえるよう対策する必要があると思います。

7 学校での取組として、1「SDGsなど現代的な課題に関連する蔵書の充実」、2「さいたま市子ども読書の日における取組や啓発」を掲げています。2019年に、さいたま市はSDGs未来都市に選定されました。学校教育においても各学校のSDGsを定め推進していきます。また、さいたま市子ども読書の日をきっかけに、児童生徒の読書への関心を高めていきます。この重点的な取組について、どのようにお考えですか。

また、学校での取組全体についてもご意見がございましたらお書きください。

(素案20p)

<委員>

冒頭の「1素案全体の構成」でも述べましたので繰り返しになりますが、SDGsは学校での取組に限らず、今回の読書活動推進計画全体の取組中に位置付けられているのではないのでしょうか？学校で「特に重視する」という説明ならまだ少し分かる気もするのですが。また私には、「SDGsなど現代的な課題に関連する蔵書の充実」の取組の内容と目的がよく分かりません(何を・何のために)。どのような資料群が対象となるのでしょうか。それを学校図書館の蔵書とすること、高校生にSDGsについて自発的に深く学んでもらおうという意図でしょうか？

22～23pの項目の並べ方ですが、「子ども読書の日」と「さいたま市子ども読書の日」の取組が一連となる並びがいいと思います。

21pの「さいたま市の子どもたちは日本で一番本が好き」は今回(第四次)の目標である「読書を好きな子どもを増やす」と関連して作られたキャッチフレーズなのかと思って調べたら、「さいたま市学校図書館資源共有推進事業」で謳われていたことが分かりました。第四次の読書推進計画の目標を設定するよりも前に、さいたま市の姿勢として「読書が好きだ」という子どもを積極的に増やそう、そういう市にしよう、という能動的な考え方があったのだということの本計画策定過程のどこかに書いてほしいです。

<委員>

未来を担う子供達にはとても大事なことだと思います。

<委員>

「さいたま市の子どもたちは日本で一番本が好き」に本気でしたいなら…。

1. 読書感想文を、宿題として出すのをやめ、自由課題とする。

2. さいたま市の全小中学校で原則毎日、10分間読書を行う。(先生も読む)

(低学年は担任が読んでやる)\*ボランティアがやるからいいやにしない。

を行えば、多分数年かからずに現実となります。

しかし、その前に、必ず現場から「時間がない」「他に重要なことがある」との反発が予想されるので、東北大学・福音館書店などから専門家を招聘し、どれだけこのことが、子ども・社会の豊かな未来・また教師の精神安定・授業の進捗の円滑化・いじめの抑止に寄与するかを話してもらう必要があるかもしれません。

<委員>

小学校では学校図書館はよく利用されているように見えます。

各学校等のネットワークの充実により、共同利用ができていますね。

<委員>

1については、特に小学校では、日常生活に即した内容の本を選定した方が良いと考えます。

2については、具体的にどのようなものを想定していますか？

学校での取組は、どのような取組にせよ、教師一人ひとりの読書への意識にかかっているとと思います。

<委員>

SDGsの本を増やすことは社会の求めに応じているだけであって、本好きの子どもを増やすことへの手段として挙げられることには疑義があります。

当事者である子どもたちに「さいたま市の子どもたちは日本で一番本が好き」をさいたま市は目指している、とする方がよほど効果があると考えます。

<委員>

SDGsは、公立中学校では学ぶようです。私は子どもから約2年前にその言葉、読み方を教えてもらい初めて知りました。

知るようになると、SDGsの言葉が目につくようになり、TVやCMにも、SDGsのマークを見かけることも増えてきました。大宮の鑑塚公園で大きなSDGsのパネル、横断幕を見かけたこともあります。

さいたま市がSDGs未来都市に選定されたことを知る市民はほとんどいないのではないのでしょうか。市民に知ってもらうために、ポスターを掲示し、その周辺にSDGsに関する書籍を展示してはどうでしょうか。POPでSDGsを展示するのも、遠くからじっくり見て視認性が高められると良いと思います。幼児向けの分かりやすい本から大人が読める本まで、まとめて展示・陳列するほか、環境問題や地球温暖化による影響の本など、関連の本も近くに陳列する工夫が欲しいです。例として、環境に関する写真絵本や写真集、エコロジー方法を具体的に紹介している本、エコクッキングのレシピ集など。

<委員>

さいたま市が「SDGs未来都市」に選定され、すべての市立学校及び公共施設等も含

めて市を挙げて、様々な取組を行っているところでございます。

蔵書の充実については各学校で工夫して取り組んでいるところですが、どうしても文学作品中心になってしまうこともあると聞いておりますので、SDGsを含め、現代的な課題に関連する蔵書の充実を図ることができるように努めていく必要があると考えます。

また、「さいたま子ども読書の日」に関しては、新たに創設されるものですので、研修会等で周知を図ってまいります。

<委員>

SDGsの探究には、幅広い資料の収集が必要となります。是非、図書購入の予算も一緒に充実させてください。その上でも学校が自校の蔵書だけでSDGsの探究に対応するのは難しいと思うので、学校図書館支援センターの蔵書の充実も重要と考えます。また、情報収集の仕方を生徒に指導する必要もあります。学校図書館司書がその指導に当たれるよう、学校図書館支援センターによる研修の充実もお願いします。

<委員>

記載なし

8 図書館での取組として、1「小学校中学年を対象とする取組の推進」、2「ビブリオバトルイベントの拡充」、3「SNS等を活用した中高生向け読書案内の発信」を掲げています。新たな計画では、小学校中学年、中学生をメインターゲットと捉え、読書が好きになる取組や読書に関心を向ける取組を推進していくための取組として掲げたものです。この重点的な取組について、どのようにお考えですか。

また、図書館での取組全体についてもご意見がございましたらお書きください。

(素案24p)

<委員>

1「小学校中学年を対象とする取組の推進」が重点となった理由は、14pにある「中学年の時期に焦点を当てて取組を行う」を受けてのことだとは理解しますが、小学校の6年間のうちの特定の時期をピンポイントに区切ってこういう表現をするに違和感があります。今までも小学生を対象とする読書推進活動はしっかりと行ってきたことから、表現上の問題だけなのかもしれませんが「推進」ではなく「強化」等の言葉のほうがしっくりきます。

2「ビブリオバトルイベントの拡充」ですが、さまざまな取り組み（読み聞かせ、アニメーション、ブックトークなど）の中で、「なぜ、ビブリオバトルなのか」、の説明はどこかにありますでしょうか？アニメーション、読書郵便、ブックウォークの内容説明と同様、ビブリオバトルについても脚注で説明をつけ、子どもが自ら参加し、読書の楽しさを見つける試みとして有効、などという説明が欲しいです。

上記の説明に「中学生をメインターゲットと捉えている」と書いてありますがなぜ今回「中学生」をメインターゲットにしたのか、その理由がどこかに書いてありましたでしょ

うか。→「SNSを利用した中高生向け読書案内の発信」が「中学生をメインターゲットとした取組」の一つなら、表現に年齢のずれがあるのではないのでしょうか。

<委員>

良い取り組みだと思います。

<委員>

図書館おける取組としては、「としょ丸チャンネル」の開設をはじめ、とても意欲的に行われていると思います。

子どもが本好きになるかどうかは、「どれだけの量の楽しみを本からもらったか」によります。読書習慣のある子は、人生を主体的に生きるようになると思います。ベビーカーに付く、スマホ用のホルダーが販売されている時代です。

スマホのユーチューブ視聴・ゲームに打ち勝つのは並大抵のことではありませんが、「千里の道も一歩から」を念頭に頑張っていただけるとありがたいです。

<委員>

コロナ禍をきっかけに電子書籍サービス利用者が増えているのでしょうか。

ビブリオバトルイベントも拡充していただきたい。

「オ」のゆかり作家には、斎藤惇夫さんは入らないのでしょうか？

<委員>

小学校中学年にはブックトークも効果的だと思います。図書館で行うのもよいのですが、より多くの子どもを対象にするのであれば、学校で行えるといいと思います。

学校との連携を強化していくことが重要だと思います。

<委員>

ターゲットニングについて異論はありません。継続的に追跡できる評価指標や数値を工夫してください。

なお、SNSの方策は今後当然取り組んでいくべき内容ではありますが、重点施策として進めるのであれば、いわゆる“官製”のコンテンツではなく、しかし“子どもに影響を与える大人の立場”を踏まえたものであるべきだと考えます。当事者である児童生徒の意見を取り入れて事業を進められると良いのではないのでしょうか。

<委員>

電子書籍サービスの充実について、ログインの仕方や本の検索方法、貸出方法を動画で紹介する。返却は、期限が来たら自動返却なので手間がないことが最大のメリットだと思います。

電子書籍の利用方法を学ぶ機会として、図書館ツアーなどで一斉に図書館利用者カードを発行するのはどうでしょうか？そもそも、利用者カードの発行自体を後回しにしている中高生が多いように感じます。

電子書籍で、最新の書籍や未成年が興味を引くテーマの図書や著名人の本などを購入できないのでしょうか。図書館通い自体が面倒に感じる年頃に、電子書籍サービスの利用し



やすさを体験してもらうのはどうですか。

読書に関心を向ける取組の推進については、図書館の見学・借り方返し方・相談の仕方などを知る機会を校外学習として小学校のカリキュラムに取り入れる。学校案内ツアーの時に、本の借り方返し方等の説明の後で、「本にまつわる疑問や質問があったら、いつでも相談してください。いつでも大歓迎です。」と子どもたちに伝えるだけでも、聞いてみようという勇気が出るのではないかと思います。

学校図書館にはないからと読むのを諦めるのではなく、市立図書館にあるかどうか、読みたい本はどこかにきっとあると信じる気持ちを育てるサポートをすることも、図書館の役割だと思います。

<委員>

「本や図書館に親しむイベント」として、様々なイベントの企画を行ってくださっており、子どもたちの読書への興味・関心を高めることにつながっていると思います。せっかくの素晴らしい取組なので、こうしたイベントの開催について、もっと広く市民の方に伝わるとよいのではないかと思います。現在、イベントの告知などはホームページ等でのお知らせが中心になっているのでしょうか。4にあった「子どもと本を楽しむためのコンテンツ」などとの連携が図れるといいのではないかと考えます。

<委員>

公共図書館を普段使用している中学生でも、電子書籍サービスはもちろんのこと、HPの資料検索や予約の方法を知らない、または使っていない子どもが多いです。高校生だけでなく、中学生に対してもガイダンス時などに紹介してもらえるよう働きかけてはいかがでしょうか。

<委員>

記載なし

9 本市は、2019年にSDGs未来都市に選定されました。本計画においてもSDGsに資する取組を推進することとし、3つの目標を設定しましたが、どのようにお考えですか。(素案30p)

<委員>

SDGsとは何かの説明、この第四次計画中の位置づけについては最初の部分(第1章)で、もう少し丁寧に説明した方が良いのではということには既に書きました。

私自身まだSDGsについての勉強不足、理解不足を感じるのですが、02の「子どもにおはなしの世界の喜びを」～家庭・地域・学校・図書館等の連携～については、見出しの「おはなしの世界の喜び」ではなく「読書の喜び」では?説明の「家庭・地域・学校・図書館等の連携」は、SDGs11の「住み続けられるまちづくりを」ではなく、SDGs17の「パートナーシップで目標を達成しよう」につながるように感じます。

→SDGs11の「住み続けられるまちづくり」への取組であれば「子ども(と大人)が

どこでも読書の喜びに触れられる(出会える)まちに」～家庭・地域・学校・図書館それぞれの読書環境、取り組みの充実と取組～でしょうか。

<委員>

良いと思います。

<委員>

よいことだと思います。SDGsを取り上げてリンクさせれば、世間の注目度が高くなるので、大いに取り入れるべきでしょう。

<委員>

さいたま市がこういう素晴らしい計画に選定されたことは目標ができてよかったと思います。

3つの目標を達成したいですね。

<委員>

3つの目標の内容はとても良いと思います。

SDGsについては少し無理して関連付けているようにも思いますが…。

<委員>

目標設定はした方が良いと思います。ただし、語尾は「寄与していきたいと考えています」ではなく、「寄与します」にしていきたいです。

<委員>

「01子どもの読書環境の充実」について、図書館には、子どもたちの居場所や悩みに応えられる存在として機能してほしい。娯楽や教養の本だけでなく、いじめ、人間関係、虐待、性教育など、年代に応じて自分の悩みに寄り添ってくれる書籍との出会いを図書館に期待する。過激で目立つ発言ばかり取り上げられるネットニュースなどで知ったつもりでいる情報ではなく、正しい知識を書籍から得て欲しい。自分の疑問を本から回答を得られるということを知って欲しいです。

「03子どもと本をつなぐパートナーとの協力」について、公共図書館に求める取組の一例として、「あなたのお悩みに合う本をそっと紹介します。秘密は守ります」などのバッチを付け、声に出さず本を紹介するのはどうでしょうか。また、悩み事(虐待、貧困、家族等)や感情(辛い、悲しい、苦しい等)のキーワードが書かれたカードを職員に渡し、本を紹介してもらおう等。自分と同じ悩みの本や他人に相談できない分野の悩みの本があり、自分を救ってくれる一冊に出会えるチャンスを増やしてあげたい。

希望者には本にカバーを付け、タイトルが見えないようにするというサービスをするのはどうでしょうか。

多言語コーナーを作る、発達障害についての本を年齢別に紹介するなどの取組もして欲しい。

学校図書館司書は、子ども達にとって身近な大人であるため、相談しやすいコンシェルジュであって欲しい。

<委員>

17のGoalsのうち、三つが目標として設定されておりますが、目標、取組ともに適当であると考えます。特に、「誰一人とりこぼさない」という点からも、様々な形態の資料の収集・提供に努めるということは重要だと思います。

また、地域の公共図書館の役割という面から、「住み続けられるまちづくりを」が目標として入っているのも適当だと感じました。

<委員>

02の目標11「住み続けられるまちづくりを」のための、読書活動を推進する公共スペースへの普遍的アクセスは、何か具体的にこの計画の中に盛り込まれていますか。ほかの2つの目標に比べ、推進計画の内容と目標の結びつきが弱いように思います。

<委員>

記載なし

10 その他、計画書を御覧いただきお気づきの点がございましたら、御記入ください。
--

<委員>

最近、うらわ美術館のHPを拝見する機会があり、収書方針に“「本をめぐるアート」(アーティストによって制作された本や、本をテーマにした作品等、本をめぐる魅力あふれる美術作品を収集しています。身近でありながら、広がりとお行きをもつ本の表現を紹介し、特色ある美術館をめざします)”という文言を見つけました。学校と連携して「本」にまつわるさまざまな活動を行っていることも素晴らしいです。

5pの関連年表中にもあった瀬田貞二氏、石井桃子氏関連の講演会は、さいたま市が両氏と縁の深い地であり、貴重な資料群を所蔵しているからこそです。

本計画でも、うらわ美術館については20p(地域での取組)、石井桃子、瀬田貞二氏関係の児童書収集と紹介については26p(図書館での取組)に明記されていますが、このさいたま市ならではの・さいたま市でなければならない要素を大切に、独自の読書推進活動の展開を期待します。

最後に今年はコロナ禍という不測の事態により、書面で会議、メールでのやりとりなど、事務局はご苦労が多かったと思います。8月の対面の会議では委員の皆さんが熱心に、真摯に子どもの読書のことを考え、積極的に忌憚なく発言されたことがとても印象に残りました。

良い第四次計画となりますことを願っています。

\*細かいことですが、4pの下から9～7行目→“国は～図ることとしています”の記述からは、第四次の基本計画で都道府県、市町村、民間団体との連携、「子ども読書の日」等の全国的な普及啓発の推進、優れた取組の奨励が、新たに謳われた(あるいは第四次で新たに強調された)ような印象を受けます。これは第一次の基本計画からいわれてきたことで、たとえば第四次で強調されているポイントは、①発達段階に応じた取組により、読

書習慣を形成、②友人同士で行う活動等を通じ、読書への関心を高めるということではないでしょうか？少し誤解を招くような書き方かなと思います。

<委員>

計画書とは直接関係ないのかとも思いますが、図書館が教育委員会所管なのでご参考まで：さいたま市の学校には学校図書館司書が配置されており、とても良いことと思います。学校の図書室を見られる機会がたまにあり、その際はよく見てしまうのですが、皆様とても良い仕事をされており、子どもにできるだけ良書をたくさん読んでもらおうという意思が感じられます。

しかし、待遇面では非常勤であり、一般教員との格差があるようです。卒業式に伺った時でも出勤されていたことはありません。政令指定都市でもあり、他に先駆けて常勤職員とすることはできないでしょうか。こういったことに予算を使うことは、子どもの未来にとっても大変意味のあることと思うのですが。

また、一般の図書館司書の方の給与待遇面についても、是非もっと厚遇してあげてください。「文教都市さいたま」を目指すならとても大切です。

そして「文教都市さいたま」としてのさらなるイメージアップを目指すなら、例えば、市長・教育長と、著名人であり、読書の大切さについての著作も多い明治大学の齋藤孝教授や、東北大学の川島隆太教授などとのトークセッションを、それらの方の講演も兼ねて開催するか、オンラインで配信したりしてアピールすればマスコミの注目度も増し、とても効果的かと思います。

<委員>

ステイホームの今こそ、本を手にしてほしいと願うのみです。

<委員>

計画の実施にあたっては、図書館を中心とした連携が必要であることが掲げられています。この計画書を読んだだけでは、その連携の形が見えにくいので、もう少しわかりやすくなると、どのように実施されていくのかが想像しやすいと思います。

昨年8月31日に行われた推進会議で示された第四次推進計画の重点的取組案のうち、採用されなかった項目があるようです。感染症対策もあつて採用されなかったのでしょうか？

学校における学校図書館活用事例のデータベース化については、とても有意義であると考えています。

<委員>

まずはコロナ禍の中でさまざまなことに制限がある中で計画案をまとめてくださった事務局の皆様に感謝を申し上げます。わずかでもその中で貢献できていればと願うばかりです。

全体を通しての雑感なのですが、活字に抵抗が少ない人でないと読めない資料であることは否めず、この計画そのものでは一般への普及には適さないと感じています。いろいろ

るな努力を行政もしていることを広く知っていただくためにも、計画がまとまった段階でどのように平易な説明に落とし込むかという大きな課題がありますので、そこまでしっかりと力を入れてください。

最後にですが、さいたま市の子どもたちはさいたま市の宝ですから、さいたま市全体で育てていけるよう、全体で協力して進めていくための努力や工夫を行政内でも進めてください。一市民ではありますが協力を惜しまないつもりです。今回の参加は貴重な経験になりました。どうもありがとうございました。

<委員>

1 24 pにある、読書意欲を高める取組

2 24 pにある、子どもを取り巻く社会の変化にも対応できる蔵書構成

特に1・2が大切だと感じました。それにより、読書が好きになる可能性が高くなると思います。

本の出会いを提供してくれる、必要な子ども達に必要な情報と癒し、救いを届けてくれる図書館になってほしいと心から願っています。

<委員>

全体を通して、それぞれの役割と連携が明確に示されており、今後5年間の子ども読書活動の推進に向けてのイメージが具体的に見えてきたと感じました。

今後はこの計画に基づき、関係所管課とで連携を図りながらしっかりと推進していきたいと考えております。

あわせて、コロナ禍で例年通り実施できないことも多い中ではありますが、これを機に多くの子どもたちが本に触れる機会を設定していければと思います。

ありがとうございました。

<委員>

記載なし

<委員>

記載なし